

アダプテッド・スポーツ

～Connecting Disability With Flying disc～

福岡県立鞍手高等学校

古賀 広輝 子川 洋一郎 村上 幹汰 森 美咲 渡邊 陽菜
指導教員 西村彰

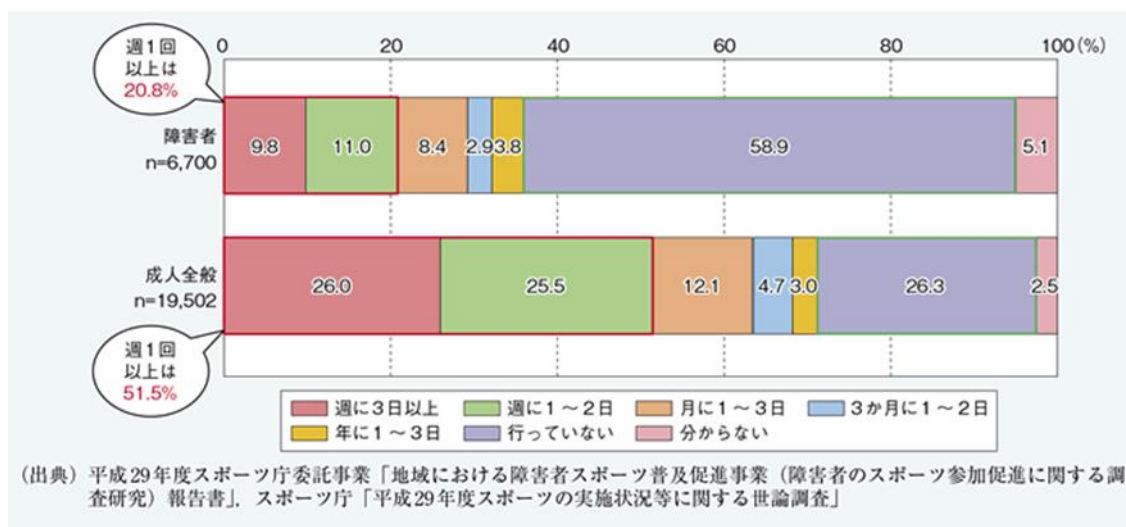
1. 背景・現状

現在、世界には数多くのスポーツがある。

2016年ブラジルのリオデジャネイロで開催されたリオオリンピックでは、206の国と地域から、11237人が参加し19日間に、28競技、306種目が行われた。オリンピックの競技として選ばれているスポーツは、競技人口が一定以上あるものなので、オリンピックに選ばれない競技人口の少ないスポーツは世界中に見当たらないほど存在している。

一方で、もう一つのオリンピックとよばれるパラリンピックでは、159の国と地域から4342人が参加し12日間に、22競技、528種目が行われた。種目数ではパラリンピックが上回っているが、参加国、参加人数、競技数では下回っている。

また、下図（障がい者と成人全般のスポーツをする日数）から現在の日本では、障がい者は成人全般と比べてスポーツを行った日数が週一回以上であるのは成人全般が51.5%に対して障がい者は20.8%と約30%低いことがわかる。逆に、下図の「行っていない」という項目では成人全般が26.3%に対して、障がい者は58.9%と倍以上の差があることがわかる。



では、なぜこのような結果になったのか東京都が「障がい者のスポーツに関する意識調査」（対象者は18歳以上の障害のあるほうによる無記名式のインターネット調査）を実施し

たところ、スポーツ・運動を実施する理由として挙げられたのは「健康・体力づくりのため」59.1%、「運動不足解消のため」42.1%、「楽しみや気晴らしのため」33.8%であった。

そして、スポーツ・運動を実施しない理由として挙げられたのは「活動したいと思わない」73.6%、「活動したいが、身体的にできない」17.6%、「活動したいが、時間がない」3.7%であった。

2. 仮説と提案

私たちは、このような背景や現状から、このままの状況が進んでゆくと、障がいを持っている人たちの運動をする機会が減っていくと共に、周りの人たちと触れ合う機会も減っていくと考えた。障がいを持っている人がなかなかスポーツに参加できない理由には二つの要因があると考えた。

まず一つの要因として、誰もが気軽に参加できるスポーツが少ないことにあると考えた。一般的に有名なスポーツは全身を使うスポーツが多く、障がいを持っている人には難しかったり、公平性に欠ける面があると考えられた。

二つ目は、アダプテッド・スポーツや障がい者スポーツの認知度の低さやスポーツに参加できる場所が少ないことが理由であると考えた。アダプテッド・スポーツや障がい者をスポーツに参加できる場所や団体を知らないため、スポーツができる環境があるが、出来ていない人も多いことがわかった。

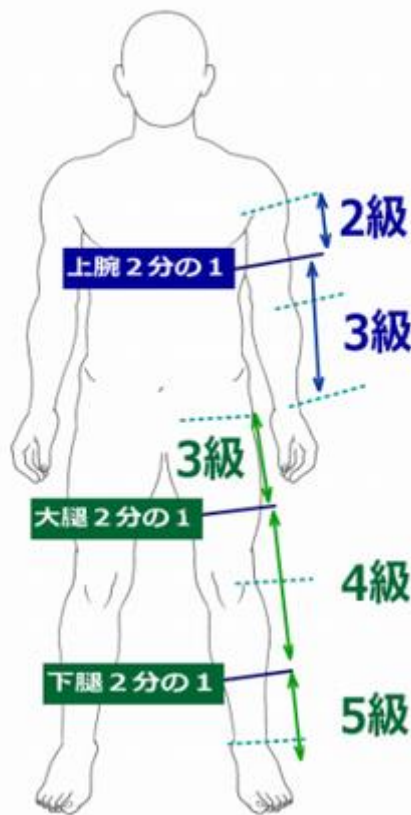
そこでわたしたちは障がい者、高齢者、子供や女性等が参加できるように考案されたスポーツ「アダプテッド・スポーツ」に着目した。そして私たちは「アダプテッド・スポーツ」を参考にした新たなスポーツを作り、誰もが運動を行ったり、大会に参加できる環境を作る。新たなスポーツの大会やイベントを行い、地域や福岡県の活性化を目指す取り組みを提案する。

アダプテッド・スポーツとは障がい者や高齢者、子供あるいは女性等が参加できるように考案された、あるいは新たに創られた運動やスポーツ、レクリエーション全般を指すもので、本来は一人一人の発達状況や身体条件に適応させたスポーツという意味である。

3. 具体的内容

ドッジボールと、フライングディスクを組み合わせたスポーツで通常のフライングディスクで使用するプラスチック製ディスクは使用せず、ドッジビーで使う布製の安全なディスクを使用する。また、1チームの人数の制限はなく、障がい者は身体障害の程度によって点数化し、人数×5点にチーム内で調整する。点数化の方法としては障がい者手帳に示されている等級によって判断する。(障がい者手帳には障害の等級が記されており身体障がい者の場合、最重度の1級から、7級までの投球がある)

等級	肢体不自由（上肢）
1級	両上肢の機能を全廃したもの 両上肢を手関節以上で欠くもの
2級	両上肢の機能の著しい障害 両上肢のすべての指を欠くもの 一上肢を上腕の2分の1以上で欠くもの 一上肢の機能を全廃したもの
3級	両上肢のおや指及びひとさし指を欠くもの 両上肢のおや指及びひとさし指の機能を全廃したもの 一上肢の機能の著しい障害 一上肢のすべての指を欠くもの 一上肢のすべての指の機能を全廃したもの
4級	両上肢のおや指を欠くもの 両上肢のおや指の機能を全廃したもの 一上肢の肩関節、肘関節又は手関節の内、いずれか一関節の機能を全廃したもの 一上肢のおや指及びひとさし指を欠くもの 一上肢のおや指及びひとさし指の機能を全廃したもの おや指又はひとさし指を含めて一上肢の三指を欠くもの おや指又はひとさし指を含めて一上肢の三指の機能を全廃したもの おや指又はひとさし指を含めて一上肢の四指の機能の著しい障害
5級	両上肢のおや指の機能の著しい障害 一上肢の肩関節、肘関節又は手関節の内、いずれか一関節の機能の著しい障害 一上肢のおや指を欠くもの 一上肢のおや指の機能を全廃したもの 一上肢のおや指及びひとさし指の機能の著しい障害 おや指又はひとさし指を含めて一上肢の三指の機能の著しい障害
6級	一上肢のおや指の機能の著しい障害 ひとさし指を含めて一上肢の二指を欠くもの ひとさし指を含めて一上肢の二指の機能を全廃したもの 一上肢の機能の軽度の障害
7級	一上肢の肩関節、肘関節又は手関節の内、いずれか一関節の機能の軽度の障害 一上肢の手指の機能の軽度の障害 ひとさし指を含めて一上肢の二指の機能の著しい障害 一上肢のなか指、くすり指及び小指を欠くもの 一上肢のなか指、くすり指及び小指の機能を全廃したもの



具体的な点数化の方法としては、障がい者手帳に記されている等級をそのまま点数とし、（等級＝点数）健常者の点数は10点とする。

また、両下肢を全廃した、あるいは著しい障がいの場合、椅子を用いて「ディフェンス」として守備を担当する。ディフェンスにディスクが当たっても外野に出ることはありませんが、あてたチームは、外野から一人内野へと移動できます。車いすの場合、攻撃に参加するか、ディフェンスになるのか選択できるものとする。

各チームのパイロンの位置はチームの作戦として自由に配置できるものとし、相手陣地にあるパイロンにディスクが当たれば、その時点であてたチームの勝利となる。

また、最後にディフェンスが残った場合でも、そのチームの負けとする。コートは、参加人数によってバレーコートとバスケットコートのどちらでも使用でき、だれでも気軽に参加できるようにする。

4. 結論

私たちが提案した新たなスポーツを作ることで、障がい者が参加しやすい環境を作る取り組みは、それぞれの人を持っているスポーツをするうえで不便であったり、参加しにくい理由を事前に踏まえたうえで、ルールや試合内容を決めるため、新しく誰もが参加できるスポーツを紹介することができる。

また、新たなスポーツを通じたイベントや大会を行なうと、地域の活性化や多くの人にスポーツや運動を行う場や機会を与えることができる。大会では、チームごとのユニフォームやTシャツを作ることで、多少の経済効果や今後のスポーツ普及に向けての資金を集めることができる。

また、調べてみると全国の体育館やスポーツセンターでは、障がい者の利用料金を5割や全額免除にするなどの取り組みが行われている。実際に、私たちが住んでいる福岡県でも福岡市総合体育館では、障がい者の利用料金と付き添い一名が全額免除になるというサービスを受けられる。

今後の課題

今後の課題として、私たちは実際に障がい者とスポーツを行い検証を行ったわけではない。そのため新しい問題やルール上での不備が見つかる可能性があるため、もっと注意深く新しいスポーツについて考える必要がある。

さらに、大会やイベントを行う際による資金についても考えなければいけない。また、多くの人を集めるための広告費なども計算しないといけない。広告費についてはSNSなどを利用するという方法も考えている。運営のための資金を提供してくれる会社やスポンサーを確保するための手段も考えていかないといけない。これらについては、今後も調査を続けて、考えを深めていこうと思う。